

## 外国語と私 Foreign languages and me

### ドイツ語が好き？！

最上 善広

もう10年以上も前になるが、2年間をドイツ(当時は西ドイツ)で暮らしたことがある。ルール大学の客員研究員に招かれてのことだったので、仕事の腕には自信があったものの、ドイツ語の能力はほとんどないまま、ドイツでの暮らしを始めることとなった。

大学(教養課程)での第二外国語はドイツ語で、大学院の入学試験もドイツ語(英語の他に!)で受けたので、全く知識がなかったわけではないけれど、言葉の上での大きな不安を抱えてのドイツ暮らしであった。研究室では英語で通せても、いったん外にでると全くわからない言葉の洪水である。そのときになって、大学で2年間もドイツ語を勉強したにもかかわらず、「生きた」ドイツ語を聞く機会がほとんど無かったことに気がついた。「あのときもっとまじめにやっていたらなあ」と後悔しながら、ドイツ語と新たに付き合うこととなった。

ドイツ語は、主に学術用語として、日本語の中に入り込んでいる。例えば、ナトリウム、カリウムはそれぞれドイツ語で, Natrium, Kalium. 蛋白質は Eiweisz で卵(Ei)と白(Weisz)との組み合わせである。(ところで, sz(エス・ツェット)は、ギリシア文字のベータ( $\beta$ )みたいな文字を充てるが、多くのワープロソフトではサポートしていない場合が多いので、このままの表記を用いることとする。)その他にマンションの名前に見られる「ハイム」も Heim(英語の home)である。しかしなんと言っても一番流通しているドイツ語はアルバイト(Arbeit)であろう。これが日本語化して、さらにもうひとつの日本語化した言葉とくっついて、アルバイト・マガジンという言葉ができるほど、日常言語化している。これは、もともとは違う言語(ドイツ語と英語)のミックスであり、両方が完全に日本語の単語として同化(帰化?)していることを示している。この様な例の最たるものが、「フリーター」で、free-Arbeiterがさらに変形した結果と考えると、日本語のもつ、懐の深さというか、節操のなさというか、とにかく適応性の高さを象徴している言葉である。

カタカナ化しているドイツ語ばかり聞いていると気がつかないのだが、ドイツ語はやたらと子音が耳につく言葉である。母音の比率の多い日本語と比べると、なんだか地の底からわき上がってくるような響きがある。あるドイツ文学者は、「ゲルマンの奥深い森の中から忍びでてくる様な」という表現をしていたが、思わず納得してしまう。もっともポピュラーな聖歌である「聖しこの夜」を始めてドイツ語で聞いたとき(これらの聖歌の多くはマルチン・ルターが作ったと言われている)、日本語版とは全く違った印象を持ったのを覚えている。

ドイツ語で悩んだもののひとつに、数の表し方がある。35は英語だと thirty five で日本語と一緒にだけれど、ドイツ語だと fünf und dreizig(5と30)という言い方になる。これが知識の上では分かっているにもかかわらず聞き取れない。始めのうちは買い物をして、言われた値段の数字が聞き取れず、常に大きいお札を出してしまい、小銭ばかりが貯

まっていた。

音声ばかりではなく、書いたものでも思わぬ障害に出くわす。ドイツ語には花文字と呼ばれる特殊書体があり、ちょっとしたレストランだと、メニューがこれで書かれている。これがわからない。外国人が出入りするところだと、普通の文字も使われていたり、英語の説明があったりするが、田舎に行ったらそんなサービスもない。ドイツは至る所田舎だらけなので(そこがまたいいのだけれど)、うっかりすると、とてつもないものを注文してしまって途方にくれたりする。

2年の留学も終わり、私のドイツ体験はあまり言語的の上達を見ることもなく終わりを告げたのだけれど、その後思わぬところで「威力」を発揮することとなった。ドイツから帰って1年ほど経って、ソ連(現ロシア)を訪れた。日本の宇宙飛行士第一号という、テレビ局の企画の中で宇宙実験の行うというのが訪問の目的であった。従って、ソ連の宇宙関係の技術者と直接話をする必要があったのだが、ほとんど英語が通じない。こちらはロシア語なんて「スパシーバ」くらいしか知らない。そんなときに、ドイツ語が共通言語として機能したのである。

ソ連の宇宙技術(ロケット技術)は第2次世界大戦でのドイツの技術を取り込んだものである。これはアメリカも一緒に、アポロ計画推進の中心人物は、ペーネミュンデ基地でV2号ロケットの開発に携わっていた、フォン・ブラウンであったし、ソ連ではフォン・ブラウンの上司に当たる、ドルンベルガーが中心となっていた。従って、アメリカもソ連も初めのころはほとんどドイツの技術に頼っていたわけで、そのころの風刺漫画では、宇宙空間ですれ違った米ソの人工衛星が“Guten Tag”とドイツ語で挨拶する場面が描かれていたりした。おそらくソ連では、科学技術の多くをドイツから吸収した結果、ドイツ語をテキストとした教育がなされ、エンジニアや科学者にとってもっとも身近な外国語となったのであろう。

通訳がいなくなって話が续かなくなったときに、ソ連の研究者が、「ドイツ語はできるか」と聞いてきた。思わず、“Ja”と答えたが、一抹の不安がよぎった。私の実力では難しいことは話せない、実験条件の摺り合わせなんかを要求されたらどうしよう。その不安は向こうも一緒だったらしく、あまり難しい話はしなくて済んだ(というより、はっきり言うてできなかった)。あのときにした、昼ご飯の時間設定が私のドイツ語会話の最後だったような気がする。

### 非母国語をなぜわざわざ学びたいのですか？

松浦 秀治

私は日本語が好きである。それに対して、外国語(非母国語)は嫌いである。なぜならば、非母国語で「考える」ことができないからである。そもそも、「外国語問題」に関する本課題についてもっともらしいことを日本語で考えながら、日本語で本稿を書いていることこそ皮肉な自己満足であり、恥ずかしさでサッサとキーボードをしまいたくなる。そうは言っても、偉そうにあるいはへりくだっても何やら喋って(書いて)しまうのが大学教員の性というも

のであるので、諦めることとするが（諦めるのは私ではなくて読む方であるが）、外国語を嫌う上記の理由を私により強く感じさせるのも、私が大学教員であるということに深い関係がある。

一般的に大学では学問を追及し、科学的研究がおこなわれているといわれる。すなわち知識の組織的・体系的なまとまりを「論証が可能な認識」としてとらえる努力がなされている、とすれば、そこには少なくとも思弁による理性的・抽象的理解が介在せざるを得ない。言い換えれば、ある言語と記号を使って論理的にどこまで理解できるかということである。学問は、それが何語で書かれているかによって上下や貴賤があるのではなく、その論理の妥当性が問われるのである。論理的思考は、ごく一部の人を除いて、最も得意なひとつの言語を介して進められるが、その言語は通常その人の母国語であろう。宣言するが、私は「日本語で」学問をしている。日本人が書いた論文であるのに、論理性に富んだ和文論文よりも、論理性に乏しい英文論文の方が（点数が）高く評価されるような昨今の風潮を見るにつけ、私はますます日本語を応援したくなるのである。

一方で、「困ったことに」学問には外国語が必須である。言うまでもないが、学問は人類共通の財産であり、科学が合理的な知識の「積み重ね」である限り、より多くの人に研究成果を知ってもらうことが大切であり、より広く既存の知識を取り入れる必要がある。ただし、後者に関して外国語が不可欠であることは論を待たないが、前者については、たとえば英語を母国語とする人が日本語で書いても必ずしもより多くの人を読むとは限らないし、日本人が英語で書いたがゆえに、日本語で書くよりも読者が減ってしまうのも珍しくないことに留意する必要がある。いずれにしても、私の場合は、研究者になる上で外国語を「義務教育以上に」学ぶことを要したのであり、いまだに通勤の途中に不幸にもしばしば語学のCDなどを聞いたりしている。不幸ついでに、本誌編集人のA先生に脅されて、この原稿を書いているのであるが、本誌は「生活工学研究」ということで、読者は研究者あるいは研究者をめざしている方々であろうから、自分は研究者として、なぜどのような目的でどのようなスキル（技能）の外国語を学ぶのかを明確にしてほしい。言い尽くされたことではあるが、人生よりも学問に要する時間の方がずっと長いので（この意味で科学者とは「死ぬまでに自分の疑問点を解決して幸せな気持ちになる」ことを諦めた人たちである）、趣味として外国語を習う人以外は、研究に関する時間（および酒を飲む時間）を削ってまで研究の役に立つかわからない外国語を勉強する時間は無い。それくらいであれば、合理的判断の一手段となる統計学や論理の進め方を勉強した方が研究者としてずっと相応しい。

さて、標題の「非母国語をなぜわざわざ学びたいのですか？」ということについては以上であるが、どうも私の外国語嫌いをもっともらしく弁明しているだけのように聞こえないこともないので、標題からは外れるが、少しばかりの私の経験から「研究者としての英語」について若干言及してみたい。もちろん英語以外の外国語が必要になることもある。私の専門である自然人類学では、人骨や生体の国際的に共通した計測法は元々ドイツ語で書かれているし、私がジャワ原人の研究をしていることから、インドネシア語の論文を苦労して読んだこともある。しかしながら、今や英語は国際語としてだけでなく、特に各国の研究者の共通言語としての役割を演じているので、腹は立つが、研究者として英語を勉強しないという選択はないのが現状である。以下、英語の「聞く・話す」と「読む・書く」について触れるが、研究者として私が思う優先順位は「読む、書く、話す、聞く」の順であることを註記しておく。

まず「聞く・話す」であるが、ご存じのようにこの二つの機能を司る脳の領野が別々であることを述べるまでもなく、リスニングとスピーキングは全く別の能力である。この中で特に日本人は英語のリスニングが苦手なようであるが、母音が重要な働きをする日本語の環境下で育まれた「日本人の脳」で、母音が伴わない子音のかたまりだけでも言語音として処理する（むしろ母音だけでは言語音として処理しない）「西欧人の脳」が運用する英語が解るはずがない（逆も真なり）、と早く諦めるのがよい。気が楽になる。カタカナ英語はいけないというが、どうもリスニングについては日本語で育った我々には、子音も「母音を補ったカタカナ」にしか聞こえないのであるから、なぜ nickel（通常この e は発音が省略されるので、この語は実質的に母音がひとつで、その他は子音からなる）が「ネコ」と聞こえるのかと悩む前に、そう聞こえたら nickel のことかもしれないと思えばよいのであって、「ニックル」と発音されると期待しなければよいのである。これとは関係ないが、「プロフェサオジャワ」と聞こえたら、ああ Ogawa（小川）先生のことかと思えばよい。なお、リスニング能力を上げるためには標準的な英語を繰り返し聞くことが大切であるとされるが、研究テーマによっては必ずしもそれでよいとは言えない。私は前述のようにジャワ原人の研究をしているので、インドネシアの研究者と共同調査をおこなっているが、airport は殆どの場合「アイルポルト」のように発音されるし、また、インドネシア語には「しゃ行」の音が無く、家電メーカーの Sharp は「スハルプ」となるので、付き合いによっては「その国の英語」の発音特徴にもなれておく必要がある。反対に、話す方は標準的な発音で構わないように、インドネシアでも「エアポート」は airport と問題なく理解してくれる。結局、リスニングは相手の発音に合わせて、スピーキングは（相手も習っているであろう）標準的な発音をまねておくのが我々にとっては現実的であるということになる。発音をまねるといっても、日本人は子音だけの発声は苦手であるので、可及的に近いカタカナで構わない。たとえば上述の nickel はもちろん「ニックル」ではダメであろうが、最初から「ネコ」とそのまま言うのも変で、「ニクウ」のように発声して、聞きようによっては「ネコ」のように聞こえるのが無難なのであろう。

次に「読む・書く」であるが、これはかなり相関関係が強い。と言うか、関係が強くなるように努力するのが研究者の英語としては肝要である。言い換えれば、自分の専門分野の英文論文をたくさん読んで、（英語を母国語とする人の書いた論文で）気に入った表現があれば、それを記録しておき、「英文論文執筆参照用ノート」を作っておくことである。「科学論文表現和英辞典」や「論文英語のすべて」のような本も、もちろん役に立つし必要であるが、このノートは結構重宝である。論文には論文用の語彙と表現があり、まずは同じ目的で書かれた文章をまねることで、それをしないと中学生の英作文になってしまう。ただ、気に入った表現を使おうとするあまり、その英文構造に引きずられて、いきおい「言えないことまで言うてしまう」ことにならないような用心は必要である。いずれにしても、まずは研究に関連する英文論文を読むことから始めなくてはいけないが、私は、研究者になろうとしている人には、黙って30篇読みなさいと言うことにしている。最初はちんぷんかんぷんで、内容を理解するまでもなく英文そのものも読解できないで、1篇を読むのに2週間も1ヵ月もかかるかもしれないが、我慢して頑張っていれば、15篇くらいからそれまでの論文も含めて急に解るようになり、30篇に達する頃には辞書無しで「斜め読み」ができるようになる（と思う）。ここで重要なことは、最初はとにかく辞書をひくことであり、知っている単語でも意味が通じな

ければひいてみることで、そこにはいつもとは違う訳語が見つかるはずである。また、ある分野の用語辞典も必要であるが、英和辞典はできるだけ大きいものを使うべきで、研究社の「新英和大辞典」を座右に備えることをお勧めする。よく学生が「先生、この単語は辞書に載ってません」と言ってくる。その中には確かに辞書には無いような特殊な専門用語もあるが、殆どの場合、それは自分の持っている中型の辞書には載っていなかったということで、大きな辞書を見れば載っていることが多い(ケシカラン!よく調べてから質問に来なさい)。ちなみに、私は中学生のときから40年近く基本的には件の研究社「新英和大辞典」を使用しているが、最近それを持つたびに手首が折れそうになってきたので、早く電子辞書化されないかと心待ちにしている。

さて、不幸で「皮肉な自己満足」にしては取り留めもなく書いてきたが、最後に一冊の本を推薦しておく。この他にも目から鱗が落ちるような内容が書かれた本も多々あるが、実用性と効果とを考えると、次の本を挙げることにする。湊 宏, R.L. Rich 著「化学英語 - 英語らしい表現とその使い方」東京化学同人 (2520 円)。この一冊であたの論文英語が変わる!?

## 外国語≠英語

### 新名 謙二

私はほぼ2年に1度の割合でヨーロッパスポーツマネジメント学会に出席しています。この学会は毎年1回開かれますが、開催国が毎回変わります。おかげで学会に出席するだけでヨーロッパ各地を訪れることができます。学会での公用語は英語ですが、多くの場合開催国の母国語も公用語とされます。例えばスペインで開催された時は英語とスペイン語が公用語となりました。このため、英語以外の多くの言語にも接することになります。限られた経験ではありますが、学会出席を通じて私が外国語について考えた(体験した)ことを書いてみたいと思います。

#### <外国語が得意な人々>

概してベネルクス3国では3カ国語以上を話す人の割合が高いようです。ベルギー人の友人は5カ国語をしゃべれると言っていました(英語、フランス語、オランダ語は実際に話しているのを見ました)。もっとも彼は非常に優秀なので、誰もがそんなにたくさんの言語を操れるとは限らないのではないのでしょうか。

北欧の人は母国語以外に英語も話すのが普通ようです。ノルウェーの人になぜかと尋ねたら、「貿易をしないと国が成り立たない。英語を話さないとビジネスができないから」という趣旨の答えでした。必要に迫られてということでしょうか。言語体系が英語と近いという利点もあるのかも知れません。北欧でも言語の系統が全く異なるフィンランド人には英語が苦手な人が多いようです。

#### <外国語が苦手な人々>

南欧には英語を苦手とする人がたくさんいるようです。国際学会に出てくるような人の中にさえ、英語がほとんど理解できない(もちろん話せない)人がいます。でもイタリア語、スペイン語、ポルトガル語のうちのどれか2カ国語以上をしゃべれる人はかなりいるようですので、外国語が苦手というのは失礼かも知れません。

実はイギリス人は外国語が苦手じゃないかと思えます(根拠はありませんが)。なぜなら、彼らが英語以外で話しているのをめったに見ないからです。多くの場合は英語以外の言語を母国語とする人たちが“わざわざ”英語を使って話しています。かくいう私もイギリス人と話をする時は日本語ではなく英語を使うことが圧倒的に多いです。

#### <同時通訳の限界>

例えば英語とフランス語が学会での公用語になっている場合、同時通訳のサービスがあって、英語の発言はフランス語に、フランス語の発言は英語に直してくれます。ところが他の言語から英語に直す通訳はかなり怪しいもので、発言の半分も翻訳されていない場合も頻繁にあります。特に発言者が早口でしゃべったりした場合など、通訳もお手上げという感じで、全く訳されないこともあります。困るのは自分の発表に対して英語以外の言語で質問されたときです。通訳がきちんとなされていればともかく(それでも自分できちんと英語を理解しないとイケませんが)、今ひとつ信頼がおけない場合など、勘に頼って返事をするよりありません。たいていは時間がなくなってセッション終了後に身振り手振りの会話でコミュニケーションをとることになります。

#### <日本人は英語が下手か?>

英語を母国語とする人々と比べると、日本人の英語は下手かも知れませんが、英語を母国語としない人々、例えばラテン系の言葉を話す人々やスラブ系の言葉を話す人々と比べると特別日本人が下手だとは思えません。何を言っているのかさっぱりわからない発表や、文法や綴り字に明らかな誤りのある文章を見かけることも珍しくありません。概してスペインやポルトガルの研究者は、英語ができないことに対して同情や理解を示してくれます。自分たちも苦勞しているからでしょうか。面白いのは(皮肉なのは)そのような人々と会話をする時に英語を使わなければならないことです。残念ながら私のスペイン語やポルトガル語の能力では挨拶程度の会話しかできませんので。

#### <フランス人の英語嫌いは本当か?>

「フランス人は英語が嫌いだから、Can you speak English?と尋ねてはいけない。Yes, I can. But I don't.と答えられてしまうから。」というような話を聞いたことがあります。事の実偽はともかく、英語が苦手な人は少なくないようです。INSEP(フランスの国立スポーツ科学センター)の研究者の中にも、英語が得意でない人が何人かいました。一般人に至っては推して知るべしではないでしょうか。

#### <外国人恐怖症?>

とある列車の中でのこと、ある外国人が次の駅で降りるために隣の席に座っていた年配の婦人にゆっくり話しかけました。「アノー、ツギノエキデオリマスガ、ソノトキニトオシテモラエマセンカ」。婦人はあわてて通路を挟んで座っている夫に助けを求めました。「ちょっと、お父さん、隣の外人さんが何か言っているよ。私は英語ができないから代わりに聞いてよ」。この会話は日本ではなく、スペインでマドリッドからバスク地方へ移動する列車の中で交わされたものです。外国人とは私のことで、カタカナ部分は一応スペイン語でこんなことを言ったつもりです(実際に何と言ったかはもう忘れてしまいました)。その後の婦人と夫との会話はかなりの部分私の推測ですが、きっとこんな内容だったと思います。英語ではなく日本語あるいは中国語だったかも知れませんが。

このような会話は日本やスペインの田舎ではありそうですが、イギリスの田舎ではありそうに思えません。「外国人はきっと自分の母国語をしゃべらないだろう」という思いこみが“外国人恐怖症”となってとっさの会話に現れるのではないのでしょうか。

ちなみにこの会話の後、何とかコミュニケーションがとれ、なんと手作りのお菓子をごちそうになりました。言葉というものがどんなに大きな力を持っているかを思い知らされました。

#### <私はバイリンガル?>

実は私にとっての第一外国語は日本語(標準語)です。